

筋拘縮症研究班発生子防部会中間報告

班員	国立小児病院	堀		誠
研究協力者	東北大学法医学	赤	石	英
	熊本大学整形外科	北	川	敏
	昭和大学整形外科	上	村	正
	日本大学整形外科	佐	野	精
	国立名古屋病院小児科	森		正
	静岡県立こども病院	中	村	孝

前回はクロロマイセチン・ゾル（三共）1g/4ml, 硫酸カナマイシン（明治）1g/3.2ml 注射用蒸留水, ケフロジン（シオノギ）1g/4ml 注射用蒸留水, スルピリン（第一製薬）25%メチロン, フェノバール（藤永薬品）10%, レスタミン（コーワ）10mg/ml, イノリン（田辺）のそれぞれ0.5mlを白色ウサギ（雄）の大腿外側に1回筋注射し、投与後3日, 7日, 28日目における筋肉の局所障害につき報告したが、今回は前回の成績で組織障害が最も少なかったイノリンと、組織障害が高度であったクロラムフェニコール・ゾル, スルピリン25%メチロンを、同じ方法で用量を同一箇所連続筋肉注射した際の組織障害の程度と、連続注射後の影響につき観察を行った。

1. 実験方法

1) 使用薬剤, 注射部位, 注射回数

イノリン（田辺）0.1mg/ml, スルピリン（第一製薬）25%メチロン, クロロマイセチン・ゾル（三共）1g/4mlを、1回量それぞれ0.5ml/body, 月曜日より金曜日まで1日1回5日間, 2日間おいてさらに月曜日より金曜日まで1日1回5日間連続注射, 計10回, 大腿外側広筋で同一部位に深さ10mmとして針を刺入した。

対照には注射用生理食塩液を用量・同回数・同様の方法で注射した。

2) 使用動物

日本白色在来種ウサギの雄で、体重2kg前後, 右大腿を試験肢, 左大腿を対照肢とし各群5羽ずつを用いた。

3) 観察期間

投与後1ヵ月, 3ヵ月, 6ヵ月

4) 観察方法

全放血で失血致死させ、摘出した大腿外側広筋について幅約3—5mmに横断し、肉眼および組織学的な検

査を行ない、薬務局安全課の「注射剤の局所障害性に関する動物試験法(案)」に準じて、局所障害性を総合的に判定した。

2. 実験結果

各液注射群とも実験中跛行や拘縮などの所見は認められなかったが、組織反応性は次の如くであった。

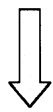
イノリンは対照群と肉眼的にも顕鏡的にも両者に差異を認めなかった。

クロラムフェニコール・ゾルは実験群に肉眼的に筋の白変, 顕鏡的に線維化, 変性が著しかった。

スルピリン25%メチロンでは上記所見がイノリンとクロラムフェニコール・ゾルの中間的変化であった。

3. 考案

今回の実験結果から実験中に跛行や拘縮などの機能障害の所見は認められなかったが、今後は被験動物の成熟差, 連続注射の方法（毎回注射部位を変更するなど）等に検討を加え、機能的な変動ならびに筋肉組織の肉眼的・組織学的変化につき観察する必要がある。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



前回はクロロマイセチン・ゾル(三共)1g/4ml, 硫酸カナマイシン(明治)1g/3.2ml 注射用蒸留水, ケフロジン(シオノギ)1g/4ml 注射用蒸留水, スルピリン(第一製薬)25%メチロン, フェノバール(藤永薬品)10%, レスタミン(コーワ)10mg/ml, イノリン(田辺)のそれぞれ 0.5ml を白色ウサギ(雄)の大腿外側に1回筋注し, 投与後3日, 7日, 28日目における筋肉の局所障害につき報告したが, 今回は前回の成績で組織障害が最も少なかったイノリンと, 組織障害が高度であったクロラムフェニコール・ゾル, スルピリン 25%メチロンを, 同じ方法で用量を同一箇所連続筋肉注射した際の組織障害の程度と, 連続注射後の影響につき観察を行った。